

## ありがとう、ながさきの空

久保 美洋子

### 「長崎学講座」の花

越中哲也理事長の許に多くの人々が集まる（長崎歴史文化協会）（以下〈歴史〉）は、一週のうちの日、水、金曜日の三日間が開かれていて、月曜の午前中には「長崎学講座」がある。週毎に違う講師が担当され、さまざまな世界を展いてくれる素敵な時間だ。年中、これだけの人材を用意できる理事長のお人柄と手腕、そして周囲の人々の熱意とが思われる。

この〈歴史〉の部屋に花があつたら、もつと親しい雰囲気になる、と思つた私は、自宅の庭で育てた花々（主に茶花の類）を持ってくるようになった。



庭の椿の花を嗅ぐ菜々

ただ単に、庭の植物を持ってきたてて挿していたのだけれど、越中先生より「久保さん、花の説明ばしてやってくれんね、花の名前も知らん人の多かやけん」とのお言葉があつた。一体、何年前のことだつたらうか？ それ以来私は、長崎学講座の始まる前に、ほんの少々の時間をいただき、その日持ってきた花や草を聴講の方々にお見せし、その一つ一つについての名称だけでなく、その性質や分類などを喋っている。

例えば犬蓼については、アカマンマとも呼ばれるお馴染みの雑草であること、オオイヌタデ、オオケタデなどの種類があるこ

と、などを語る。ついでに「犬蓼のひと葉ひと葉の秀先までもみぢしてをり師走の原つば」という自作短歌を披露したりもする。

町なかにある私の庭は、外部からは見えないようになっていたので、植物たちは殆ど人目に触れることがない。自宅の玄関や仏壇や茶席の床の間に挿してはいるけれど静かである。だから受講生の皆さんが領きながら見たり聞いたり誉めたりして下さるこの時間は、草花たちと私にとつて有り難いひとときだ。

### 「古文書を読む会」

歴史には「長崎学講座」の他に、毎週水曜午後の「水曜懇話会」。第二、四金曜午後の「食文化サークル」がある。私はこれに参加できないでいるけれど、談論風発の良き時間であるようだ。

そしてもう一つ、月水金からは外れているのだが、第一第三火曜日午前中に「古文書を読む会」が続けられている。越中先生が示して下さる古文書資料（おおよそ長崎に関するもの）を、先生の後見の許で川原清氏の指導により十余名の会員が、熱心にそして楽しく解説。平成十六年刊「ながさきの空・第十五集」に「長崎傳來智恵鑑」が掲載されて以降、第二十七集の「長崎村散使田川家記録」まで十三年間、毎年解説したものが、越中先生の丁寧な解題と共に掲載されてきた。

私は、この会の始めから参加して学習してきたが、「長崎傳來智恵鑑」が「ながさきの空」に載つたときの嬉しさはよく覚えている。また、毎年掲載されることによって、共に学習してきた仲間たちとの貴重な思い出となつている。長らく指導して下さった宮田修二氏は既に亡くなられたけれど、古文書に対する彼の情熱は、今でも忘れられない。また、宮田氏だけではなく、亡くなられたり事情あつて退会されたりした方々のことも胸に残っている。

### 事務局のこと

ここまで書いてきた「ながさきの空」は年一回刊の冊子（発行者・十八銀行）のことであるが、毎月一回「長崎歴史文協短信」として、A3判一枚の「ながさきの空」が発行されている。年間十二回の発行で、毎号異なる筆者によって興味深い文章が綴られ、末尾には越中先生による「風信」が載る。各月々の行事や来信などを紹介した簡潔な文章である。

その十二回の短信を核として、年一回刊の冊子「ながさきの空」が編まれるのだ。

〈歴史〉を語るときに忘れてならないのは、事務局の存在である。十八銀行のグループ会社・長崎経済研究所勤務で事務局担当の丹田智子さんは、私の知る事務員さんとしては三人目でいらつしやる。この事務員さんの存在によって「歴史」の活動はスムーズに為されているのだ。電話や来客の応待だけでも忙しそうであるが、会員諸氏への心配りや「歴史」のスケジュール管理、越中先生の秘書としての役割、加えて「ながさきの空」を毎月毎年発行する仕事「ありがとう」と感謝しても足りないようだ。

### 声に出して

「ありがとう」といえば、十一月三日の長崎市の立図書館でのご縁が思われる。越中先生の講演（長崎の絵画）が開始したとき、先生はそれまで談笑しておられた方を「僕と同級生で、お医者さん」と、会場全体に紹介された。先生の同級生ということは九十五歳かしら、と思う間もなくその方に、その場で話すように勧められたのだ。（注・片伯部貢先生）

その方は、ご自分が癌を患つたこと、「ありがとう」という言葉を声に出して毎日日々、何度も何度も繰り返した言ひ、そのことよつて癌を克服できたこと、を話された。何かしら、じーんと伝わる話であつた。普段、いろいろな場面で感謝することは多いが、口に出して「ありがとう」とは、あまり言つてないような気がする。形式的に「ありがとうございませう」と言うことはあるけれど、生活の場面々々で、素直に「ありがとう」と言つてゐるだろうか。

講演会が終つて、長崎の絵画のことを思い返しながら家路を急いだ私は「ただいま」と玄関を開けた。待ち構えていたように、猫の菜々がニャアと迎えてくれる。「ありがとう、菜々、留守番ありがとうね」と言ううと、菜々は嬉しそうにニャーンと大きな声を発した。この年末には十八歳になる猫である。

月曜日の朝、〈歴史〉へ持つて行く花を選ぶために庭へ出た私は、椿の木に、小海老草に、ウインターコスモスに「ありがとう」「ありがとう」と声をかけては剪つたのだつた。（長崎歴史文化協会理事）

### 風信

〇十二月になりました。昔は「師走」と言つていました。師走の意は「日は落つて仕事をする先生方も、十二月になると何に彼と仕事に忙しく、走り回られるので師走と言うのです」と説明される人もおられる。

〇私達の若い頃の十二月と言えば「忠臣蔵」の一年前の事件だつたのです。瀬や水の流れと人の身は「の句に答えて、義士の一人・大高源五が」あした待たるる其の宝舟」の句は今でも覚えてます。

〇これに対して長崎では深堀義士の話も有名だつたのです。時は元禄十三年十二月十九日の事件で、ちょうど「忠臣蔵」の一年前の事件だつたのです。事件内容については平幸治先生著の「深堀の歴史」（長崎新聞社刊）をお読み戴くとよい。

〇野口文竜の『長崎歳時記』（寛政七年編）によると十二月二十四日、家々に酒を入れる事を忌む 俗に酒精進という。其の由来は「当日は愛宕社の縁日であり、此の日に酒を慎しむことにより来る年の火災をまぬがる」と言う。

この頃より二七・八日此まで家々年の餅とて餅をつく：又柱もちと言う事あり 餅にて宝袋をつくり水引をつけ柱につける。この餅、新年初めて雷の鳴る日に取り出し是を焼きて食すれば雷を避る……

〇長崎旧家の年末行事については、脇山壽子女史の『脇山家おぼえ書―長崎年中行事抄』（平成二二年刊）を読まれると参考となり楽しい。

〇今月御寄贈いただいた書籍  
一、奈良国立博物館より『正倉院展図録』。宮内庁正倉院宝物が一般に拝観できようになつたのは昭和二十一年九月が第一回で今年七十回であつた。今年展示いただいたのは六十四件であり、今年の展示品の中、「聖武天皇一周忌齊会資料」は初公開であり、他に奈良時代銭貨、铸塊、鏡等おどろきの物ばかりであつた。

本年も、また、除夜の鐘を御突きになって  
良き新年を御迎え下さいませ。

敬具

